4章　4J42　廣瀬　翔

406



407

1. すべての線が同じ太さになっている．
2. 縦軸量記号をイタリックのLに修正する
3. 原点数字の「0」を縦軸のスケール数字の位置に一致させる．
4. 平滑曲線がプロット点を貫通している．

408

1. 文字が多きすぎるため，本文量記号＝記号単位＞スケール数字スケール線に修正する．
2. スケール線がながすぎるため，1.5mmに短縮する
3. スケール数字，量単位・単位，図番号・キャプションが離れすぎている．
4. 座標軸とスケール数字：1~1.5mm離す．同様に，スケール数字と量記号・単位：1.5~2mm離すと体裁がよい．

409

1. 図3－図4
2. 縦軸の原点スケール数字0が欠落している．つける．

410

プロット点の種類と模様・濃淡に変化をつける→重要度・迫力に差をつける．



411

図中のプロット点が一部重なっている．重要度の高いAのプロットを上部にして描く



412

同じ形状のプロット点の場合、大きさだけを変化させても識別に時間がかかる。模様あるいは濃淡を同時に変化させるべきだ。



413



414



415



416



417



418



419



420



421



422



423



424

プロット点のばらつきを目立たないようにするために、白抜きプロット点と細い折れ線で表示する。さらに、目立たないようにするためには、太い平滑曲線を引けばよい。

425

連図作成：極端に圧縮した図だけでは、掲示できない。連図の一部として全体の縦横比の均等が取れるように工夫する。作図のポイントは、図（a）の縦軸数値「6」と図(b)の縦軸数値「0」を移動させて、鑑賞を避けることである。

426

1. 連図の距離は離れすぎている。そこで、右図のように連図間距離は1.5mmに縮める。ただし、図面の大きさによってこの距離は変化するので、図中の数値の縦長さnに対して0,6nを基準とする。

427

方法：

図(b)の横軸スケールを上部に移動させて作図すると、均等の取れた連図となる。

作製作成ポイント：

図(a)の原点はそのままだが、図(b)の原点「0」は縦軸の真横に移動させる。

428

1. スケール線を枠外に作図する
2. 原点を移動させる（原点数字「0」を縦軸横軸ともにつける。）

429

1. 原点補助線を引く
2. スケールをすべてスケール補助線に変更する。（体栽から判断）



430

1. データ線近傍に量記号を添付する
2. 細い実践の引き出し線で量記号を明示する。



431

1. は現象量A,B,Cの変化を示している。

それに対して、(2)の現象量はAだけである。3段階に変化させているのは実験条件つまりパラメータである。

432



433



434



435 436

理解した．

437



438



439



440



441



442



443



444



445



446

1. 横スケール数字0の位置
2. 横軸スケール数字と座標軸の距離
3. 横軸量記号T sとスケール表示の距離
4. 縦軸スケール数字4の位置
5. 量記号との位置
6. 記号(a)と(b)が上下非対称
7. 両図のプロット点が中黒でデータ線は同じ太さかつ同じ濃淡で表示されている。